四

正月八日、昨日とは異なり、江戸は爽やかい晴れ上がった。日が昇ると夜半の名残りの雪も見るみる消えていった。

宮戸川の帰りに、いつものように六間湯に立ち寄った磐音は、金兵衛長屋の戻る。

この日、一日延期された奈緒の吉原乗り込みが、暮れ六つには賑々しく行われる。

丁子屋では乗り込みの延期が一日で済んだことに、

「松の内ではありませぬが、末広がりの八日、おめでたいことでございます」

と喜んでいるとか。

磐音は奈緒の乗り込みが無事終わるまで見届けることを四郎兵衛と約定していた。

そこで七つまでには根岸に戻る手筈になっていた。

四郎兵衛の話では、根岸を出た行列は、寛永寺下から下谷広小路を通り、神田川沿いに浅草橋まで抜けて、えどの札差豪商が見世を連ねる御蔵前通りから山谷堀の今戸橋まで練り歩いて、ここで道中を組み直すとか。

あとは日本堤を吉原の入り口、五十間坂を下って大門を潜る手筈だった。

半刻も寝たか、長屋の戸が開けられた。

「坂崎、おるか」

中居半蔵の声だ。

「なんだ、寝ておるのか」

磐音は慌てて飛び起きた。

「昨夜は徹夜でございましたな」

「仕事か」

慌てて丸めた夜具を部屋の隅に押しやりながら、根岸の一件をざっと話した。

「金にもならぬのに命を懸けての斬り合いか。まあ、奈緒どのの身に関わることゆえ仕方はないがな」

と言いながら中居が部屋に上がってきた。

「今津屋の申しでの件、予測はしていたが藩邸じゅうが大反対だ。なぜ商人如きに藩の内情を知らせねばならぬというわけだ」

宍戸派が倒れたとはいえ、藩内部は昔ながらの頭の固い連中が牛耳っているのか、と磐音は暗澹たる気持ちになった。

「坂崎、それがしは分かっておる。それゆえ、いろいろと説得に努めた」

「どうなされますな」

参勤下番に間近に迫っていた。入費の都合がつかぬでは帰国の仕度さえもできぬのだ。

「明日の夕刻、下屋敷まで来てくれ。新任のご家老福坂利高様がそたなと会いたいと申されておる」

「承知しました」

と答えた磐音は、

「ご家老の人物ですが、いかがですか」

それが、と言った中居は顎を撫でて、

「集まりでもあまり発言はなさらぬ。いや、言葉が多い少ないの問題ではない。どこか鵺のようで摑みどころがないのだ。正睦様がなぜ利高様を江戸家老に推挙なされたか、それがし、理解がつかぬ」

と首を捻った。

「ともかく下屋敷に参ります」

利高との階段で進展があればよいがと思いながら磐音は言った。

丁子屋の寮をでた奈緒の行列の先頭に手古舞姿の禿が立ち、鳶の連中が揃いの法被で木遣りを歌い、紅白の帯で飾られた数丁の駕籠が続いた。駕籠には丁子屋の主の宇右衛門、女将のお勝らが乗っていた。さらに御簾がたらされた輿が続き、その中に一人の白拍子姿の女が乗っていた。

白拍子は平安時代の末に生まれた歌舞で、それを演じたのは遊行女婦、遊女であった。

水干、烏帽子、鞘巻姿の白拍子は、運命を享受するように乗っていた。

輿の周りは吉原・四郎兵衛会所の手代衆らが囲んでいる。

烏帽子の下のうつむき加減の顔は白くお化粧が施され、きりりと刷かれた紅が、御簾越しい見る人の心をなんともくすぐった。

根岸の里を出た行列は、東比叡山寛永寺下を下谷車坂から広小路に出た。

ここでは、大勢の人々が群がって前代未聞の輿を覗いた。が、幕府の威光を損ねぬようにか、ひたすら粛々と進んだ。それでも男たちが、

「見たか、丁子屋の新規の女郎だ。神々しいくらいに美しい女だね」

「なんでも吉原に売られたときによ、すでに千両もの値がついたというぜ」

「そんな法外な話は聞いたこともねえな」

「だがよ、御簾越しに見る女の様子のいいことは、一目千両の女だぜ」

と行く先々で八っつぁん、熊さんが声高に言い合った。

すべて丁子屋の宇右衛門が手を打ち、読売に描かせて吉原乗り込みのことをそれとなく匂わせて、江戸じゅうに知らせていた。

行列は神田川の南を越えて江戸のど真ん中に入ることなく、東へと下り曲がった。

そんな道中を、行く先々で一人の絵師が写しとる姿があった。

絵師北尾重政だ。

浅草橋を右に見て御蔵前通りに入れば、札差たちが牛耳る商人の町だ。

今津屋の老分由蔵とおこんは、橋際から奈緒の乗る輿を見物していた。そのあたりはもう黒山の人だかりである。

二人の前を行く白拍子姿の奈緒はただ一点を見据えて輿に揺られていた。

「おこんさん」

由蔵が呻くように言った。

「これほど哀しくも美しい女見たことがない。私に万両の金子があれば、この場に投げ出して奈緒様を身請けしてやりたいよ」

おこんは何も答えなかった。

奈緒の心中を、磐音の気持ちを思う老分の静かな憤りが、手に取るように理解できた。

運命に弄ばれた二人の男女が、国許から遠く二百六十余里も離れた江戸の地にいた。

女は吉原に売られようとしており、男はその姿をどこからか見つめているはずだ。

おこんのぬねも張り裂けそうであった。

美々しい飾られれば飾られるほど、奈緒の行く末は重く、苦しいものにはならないか。

おこんはただ胸の中で手を合わせ、

（病気をせぬよう、よい運に恵まれますように）

と祈った。

奈緒の行列が去った浅草橋には男たちのため息が漂い残った。

「坂崎様はどこにおられるやら」

由蔵が呟いた。

御蔵前通りでは、札差の番頭や男衆たちが道の左右から米をぱらぱらと輿に投げかけた。

吉原に入っても米の飯がついて回るようにとの祝いの米撒きだった。

着流しの磐音は、菅笠を目深に被り、奈緒の行列を人込みの外から見守っていた。

道中が御米蔵の中之御門に差し掛かったとき、

「坂崎様」

と密やかに呼ぶ声が一軒の札差の軒下からしあｔ。振り向くと吉原会所の手代の竹造だ。

「尾張の連中を見かけたそうなんで」

「昨夜のうちに品川宿から六郷に向かったのではなかったのか」

「へえっ、確かに品川宿を出るところまで見届けました。やつら、どこぞで引き返してきた様子でございます」

「伊勢崎どのの仲間たちもいたか」

「見かけられたのは、頭分の弥平に熱田の勘蔵ら、やくざ者にございます」

剣術家よりも人込みに紛れやすい男たちがなにをしようというのか。

「四郎兵衛様は、奈緒様が襲われることを懸念なされておられます」

「分かった。気を張り詰めて輿を見守ると、四郎兵衛どのに申してくれ」

「へえっ」

小を残した竹造が人込みに消えた。

すでに御蔵前通りに夕闇が迫っていた。

（なんとしても奈緒を大門の内に送り込む）

磐音は崎に進む輿を追った。

道中が進むにつれ、さらに人垣が厚くなった。

金龍山浅草寺の前を走る広小路が大川とぶつかる吾妻橋際では、何重もの人垣で黒山の人だかりだ。

もし尾張の連中が身を捨てて切り込んできたら、混乱は必死だ。奈緒の身になにもなくとも吉原への幕府のお咎めは免れない。

磐音は人込みを掻き分けて、道中の後尾に付いた。

が、何事もなく山谷堀の今戸橋まで進んだ道中は、ここで山川町の船宿の栄屋に入り、道中の模様替えを行った。

すでに予定の暮れ六つは大きく過ぎていた。

橋際に立つ磐音のもとに四郎兵衛が顔を出した。

四郎兵衛は一行の中の駕籠の一つに乗っていたのだ。

「尾張の弥平が舞い戻ったこと、訊かれましたな」

「竹造どのから聞き申した」

二人の声には緊張があった。

「私が弥平なら、日が沈んだ土手八丁で襲います」

「それがしも同じ考えです。奈緒どのはこれまでどおり、輿で進むのですか」

「それが宇右衛門様の発案で花魁道中を組むそうです」

「なんと」

遊女が妓楼から仲の町に出て、茶屋に遊客を迎えに行くことを道中に見立てて、花魁道中という。

刃物を翳した集団に襲われれば、高さ、六、七寸の畳付きの下駄を履いた奈緒は、身動きもつくまい。

「土手八丁に会所の者を飛ばして、やつらの行方を追っております。今暫くご辛抱ください」

四郎兵衛が言った。

全盛は　花の中行く　長柄傘

磐音は栄屋を出た奈緒の変身に目を見張った。

白拍子の水干、烏帽子姿から、白無垢の小袖、打ち掛けの遊女に変わっていた。

吉原では八朔、八月一日を、秋の雪とか紋日と呼んだ。

遊女たちが揃って白無垢を着て遊客を迎えるのだ

奈緒はこの白無垢に打ち掛けを着て、白塗り畳付き下駄を履いた姿で、白無垢姿の禿二人を伴い、若い衆の肩に軽く右手を置いて表に立った。

そのとき、今戸橋に集まった男たちの間から声にならないため息が洩れた。

丁子屋の家紋入りの箱提灯を持つ若い衆も白衣なら、奈緒の後に続く新造も白無垢、そして、長柄の傘もまた純白だ。

丁子屋の宇右衛門が、

「今宵、吉原に入ります遊女の白鶴にございます。よしなに御贔屓のほど、お願い奉ります」

と口上を述べて、奈緒改め白鶴の花魁道中は、土手八丁を吉原に向かって進み始めた。

磐音は、外八文字に歩を進める奈緒の背を呆然と見詰めていた。

白鶴とは、豊後関前城の別の呼び名だった。

磐音と奈緒は白鶴城を朝な夕なに見ながら育ってきたのだ。

奈緒は自ら苦界に身を投じると決心したとき、関前を棄てていた。

その奈緒が白鶴を名乗らされる。

奈緒の悲しみの深さを、磐音は切々と感じていた。

だが、今は奈緒の気持ちを慮るときではない。

磐音は気を引き締めると純白の花魁道中を追った。

四郎兵衛と磐音が襲撃を気にした土手八丁を、白鶴の一行が煌々たる明かりに浮かび上がっていく。

なんとも典雅にして清楚な風情が漂い、吉原に通う男たちを夢幻陶酔の世界に誘い込んだ。

だが、尾張の宮宿の弥平の一行が現れる気配はなかった。

弥平と熱田の勘蔵と手下たちは、そのとき、五十間茶屋町の裏手の暗がりにいた。

「勘蔵さん、あの女の顔に傷一つでもいい、見世に立てないように負わしてくだされ。さすれば尾張のメンツも立とうと言うもんじゃないか。このまま手ぶらで宮に戻ったんでは、わしら、まんまの食い上げだ」

弥平が最後の念を押すように言い、

「弥平さん、命を張ってみせますよ。それより約束の金子は忘れないでくだせえよ」

勘蔵が言い返すと、

「手筈はいいな」

と八人の手下たちを見回した。

一人は油がたっぷりはいった手桶を抱え、もう一人がまだ火をつけていない松明を持っていた。むろん白鶴の白無垢に油をかけて火をつける算段だ。

残りの六人が懐の合口の柄を確かめるように触った。

「もうそろそろ衣紋坂に入る頃合だぜ」

茶屋を連なる五十間道、通称衣紋坂から歓声が上がった。

「いいな、抜かるなよ」

熱田の勘蔵の低い声に、遊客を装った八人が黙って頷いた。

茶屋と茶屋の間の路地から衣紋坂が見えた。

熱田の勘蔵を先頭に九人がゆっくり進み、最後に弥平が従った。

勘蔵が衣紋坂の様子を覗き見て、松明に火を点けるようと命じた。路地に松明の明かりが点され、

「行くぜ！」

という勘蔵の命に九人が走りだした。

路地に残ったのは弥平一人だ。

「剣術家なんて当てにならないぜ。肝心なときにさっさと逃げ出しやがったよ」

と、頭分の伊勢崎が倒されたのに怖じ気づいて逃げた四人の剣術家のことを毒づいた。

「どけ、どきな！」

勘蔵が衣紋坂に群がる男たちを合口で押し退けるようにして、道を空けさせた。

丁子屋の白鶴の花魁道中はそのとき、勘蔵たちの十数間手前にいた。

「なんだい、こいつらはよ。白無垢の花魁道中に趣向か」

「いや、合口を閃かしているぜ」

八人の配下を従えた勘蔵がゆっくりと懐から合口を抜き上げると、花魁道中に向かって走りだした。その後を手下たちが追う。

磐音は花魁道中の後方で異変に気がついた。

かたわらには辻駕籠が止まって、駕籠かきたちが花魁道中を見送っていた。

「息杖を借り受ける」

先棒の駕籠かきの息杖を掴んだ磐音が猛然と前方へ走った。

白鶴は、大門の方角から合口を翳し、燃え盛る松明を掲げた一団が道中に襲いかかろうとするのを、平然と見ていた。

（刃に倒されるならば、それもまた世の運命）

咄嗟にそんな考えが頭裏に過ぎっていた。

そのとき、かたわらを菅笠の浪人が走り抜けた。

白鶴は立ち竦んだ。

（あれは……）

磐音は、すでに道中の先頭に二間と迫った熱田の勘蔵の合口の切っ先が閃いたのを目に留めながら、息杖を勘蔵の横鬢に振るっていた。

怒りを呑んだ磐音の一撃が勘蔵を衣紋坂の人込みの群れに吹っ飛ばした。

という歓声が起こった。

磐音は息杖を縦横に振るい、八人の手下たちの間を旋風のように走り抜けた。

息杖が右に左に閃く度に合口が手から飛び、肩を打たれた男たちが衣紋坂に突っ伏した。

九人をことごとく倒した磐音は、大門の前で横手の路地に姿を消した。

一瞬の出来事だった。

その様子を弥平は路地の一角から呆然と見ていた。

（なんてことだ……）

五体を震わせた弥平がわれに返って路地の奥に逃げ込もうと踵を返したとき、行く手を塞ぐ人影があった。

「弥平さん、昨夜、注意申し上げましたぞ」

四郎兵衛の顔を弥平は見た。そして、胸元で光った刃物の動きに目をやろうとしたとき、冷たい痛みが心臓を貫いた。

翌日の夕暮れ、磐音は、芝二本榎にある豊後関前藩の下屋敷の裏口を訪ねた。そこには御直目付の中居半蔵が待っていた。

「よう来たな」

中居が案内していったのは、藩主が下屋敷滞在の折りに使われる奥書院だった。

「ご家老」

と廊下から声をかけ、中居自らが障子を引き開けた。

一人の中年の武士が、春めいた鶯色の絹物を召して悠然と座っていた。

磐音は中居に続いて奥書院に入ると、正座した。

新任の江戸家老福坂利高は、面差しが藩主の実高とどことなく似ていた。従兄弟同士だ、似ていて不思議ではない。

「おおっ、そなたが正睦どのの嫡男か」

「坂崎磐音にございます」

磐音は平伏した。

「わしは幼少から病がちでな、表に立つことはなかったゆえ、そなたにも会う機会がなかった。この度、正睦どのに請われて江戸屋敷に着任いたした。よしなにな」

磊落に利高が言った。

「利高様、それがし、藩を離れた身にございますれば、さようなご丁寧な挨拶、恐縮するばかりにございます」

「藩を離れたとは申せ、それは仔細あってのことと聞いておる。わしは江戸の事情には暗い。いろいろと教えてもらいたい」

「はっ」

と磐音が平伏すると、

「今津屋の申し出、中居半蔵を通して聞いた。江戸の商人は、さほどに力があるものか」

と磐音に訊いてきた。

「利高さま」

磐音は市井に暮らして実感した豪商たちの実態を話して聞かせた。

利高は眠ったような眼差しで磐音の言葉に聞き入っていた。

「坂崎、つまり関前藩はなんぞ担保を指し示さぬ限り、殿のご帰国の費用は借りられぬと申すのだな」

「はっ、初めての取引にございますれば、関前藩も気持ちをかたちに表すことが肝要かと考えます」

誠意を示せという磐音の言葉に利高は暫く黙りこんで考えていたが、

「国許を出るとき、正睦どのより、もしやの場合は、歴代の藩主が集めてこられた江戸藩邸の書画骨董刀剣を使うよう言われて参った。もはや、これしか手はあるまいな」

と呟いた。

「なんと藩の宝まで出されますか」

中居半蔵が呻いた。

「坂崎、今津屋の主と会いたい。仲介してくれぬか」

「畏まりました」

「一日も早いほうがよいな」

はっ、と畏まった磐音が、

「恐れながら申し上げたき儀がございます。利高様、お怒りにならずにお聞きいただけますか」

「なんなりと遠慮のう申せ」

「藩の財政を改善するために実高様自ら率先して質素倹約を旨とし、衣服も食べ物も質素なものをと心がけておられると聞き及びました」

「江戸に来て知った。なかなか厳しいのう」

「今津屋と面会の日、利高様には、木綿のにてお越し願いとう存じます」

「な、なんと申したか」

利高の血相が変わった。が、瞑目して気持ちを鎮めた後、

「うっかりしておった、坂崎」

と震える声で応じた。

磐音は父の正睦が利高を登用した理由の一端を知った思いがした。

利高は物事を知らぬのだ。だが、諫言いたさば気がついてくれる人物ではないかと考えながら、平伏した。